

赤松俊秀校註

隔葉記 第一

本書は、いうまでもなく近世初期の京都鹿苑寺（金閣寺）住職鳳林承章の日録である。

一昨年来、赤松俊秀教授の手により、野間光辰教授及び京大大学院学生有志の協力を得て刊行の準備が進められていたが、この程第一巻の上梓をみた。

鳳林承章の事蹟と本書の史料的価値については、今さら紹介するまでもないかと思う。日録は寛永十二年承章四十四歳より、寛文八年七十六歳、遷化のわずか二ヶ月前まで、三十余年にわたつて殆んどよどみなく書記され、三十巻の多きに達する。その内容は、承章が整備につとめた金閣や庭園についての記録をはじめとして、相国寺・南禅寺など京都禅院の生活や法会、江戸幕府・京都所司代との政治接衝、寺領の経営など、近世禅宗の貴重な記録である。承章は禅僧であるとともに当時第一等の文化人でもあり、洛北に咲いた寛永町衆文化の末期に身を置いた人である

が、この記録は後水尾上皇をはじめとし、近衛信尋、一条昭良その他の公卿、門跡法親王華道の池坊、茶人金森宗和・千宗旦、また俳諧北野会所に集う人々などとの深い交わりを伝え、更には、金閣門前や京都市中、あるいは旅先きでの見聞にもくわしい。かくて本書は単に金閣寺あるいは禅宗の記録たるにとどまらず当時の公家社会の姿を伝え、文芸はじめ茶道、華道などの文化史また風俗史などの貴重な史料でもあり、鹿苑寺に原本を、史料編纂所に写本を存するものの、久しく刊行上梓を待望されていたものである。それだけに、

今ここに赤松教授はじめ関係者一同の努力が実を結んで刊行された意義はまことに大きなものがある。なお、本書は鹿苑寺の自費刊行によるものである。かかる学界に裨益するところ大きい記録を上梓された英断に敬意を表したい。とともに、これを先駆として、なお数多い未公開記録史料刊行の機運が醸成することを、期待するものである。

さて刊本隔葉記は、自筆原本を底本として校正最も厳密であり、詳細懇切な頭註・傍註および句読点が施されている。全六巻の予定で（第一巻は寛永十二年より正保二年まで）

今後逐次刊行して一兩年で完結し、最後には索引年譜を附する予定と聞く。こうした編者の利用に便ならしめる為の数々の配慮によつて、本書の史料的価値は一層高まるといえよう。全巻完結の一日も早からんことを祈念する次第である。（A5版 七七〇頁 鹿苑寺発行 非売品）（熱田 公）

（なお、史学研究会では、特に会員の便宜をおはかりして本書希望の方にお取次いたします。頒価実費二、〇〇〇円送料八〇円）

平岡定海著

東大寺宗性上人之研究

並史料

上巻

本書は故大屋徳城博士の遺稿「宗性上人年譜」を、平岡定海氏が増補校訂し、巻末に「宗性上人の生涯について」と題する解説を附して公刊されたものである。大屋博士が奈良・京都の寺院経蔵や金沢文庫などから多くの古文書・経論・典籍を発見紹介し、日本仏教史上数多の卓見を示されたことは周知のところであり、名著「寧楽仏教史論」「日本仏教史の研究」始め多くの著書を遺された。宗